社会主義再考

不可能性と可能性

堀川　哲

以下の文章は一九九〇年十二月八日に東大本郷において開催された「フォーラム九〇S」で報告したものの要旨である。

1

ある種の人間にとっては、世界がカオス状のかたちで動いているということが耐えがたいものとして感じられる。このカオスに秩序を与えようとする意識の志向から諸々のイデオロギーと運動とが生まれる。マルクス主義もまたこうした意識に支えられていると言っていいだろう。

マルクス経済学は、資本主義は合理的ではない、というかたちで資本主義を批判してきた。景気循環の存在は資本主義の非合理性を証明するものと考えられた。資本主義はおのれが生みだした生産力を制御することができない、というわけである。それゆえに、制御というカテゴリーが資本主義を超えていくさいのキー・カテゴリーとなる。

近代合理主義の哲学的思考と資本主義のシステムとがどのような関係にあるのか、その問題は別としても、ともあれ、資本主義自体は一個の合理的システムとして歴史に登場してきたのであるとみていいだろう。しかし、資本主義経済の景気変動を経験することによって、資本主義はそれほど合理的なものではない、あるいは資本主義の合理性には限界があるという認識が生まれることになったのは自然の成り行きというべきである。こうした流れのなかでみてゆけば、社会主義とは資本主義的合理性の限界を突破したシステム、つまり合理主義の極限的な完成形態である、ということになる。言い換えれば、社会主義は社会と人間の行為について完璧な制御システムをもつ社会だ、という観念がおのずと成立する。

なるほど、「完璧な制御システム」への道は遠いし、困難ではあるが、この「最終目標」を放棄しないという点において、コミュニストは自己を社会主義主義者と区別していたともいえる。事実、最終目標をぼやけさせるような発想（たとえば「最終目標は無、運動が全て」という言い方）は、いつもコミュニストの側からの強い反発を誘発してきたのである。

コミュニスト的な「最終目標」が社会の全体的制御のシステム――その内部においてはじめて「人間の解放」も実現される、と言われるそれ――の樹立にあるとすれば、社会主義の経済システムが公有化と計画経済という二つの要素を基軸とするのは必然である。この二つは制御というカテゴリーにおいて統一されるのである。さらに、制御ということについて言えば、計画経済は、必然的に、大衆の欲望の制御を前提とするほかはないということに注意しておく必要がある。それは財とサービスへの欲望を制御することのみならず、職業と居住地の自由移動に対する制御をも――手段と程度は様々でありうるとしても――含まざるを得ないのである。（いわゆる「労働力商品化」の前提条

件はこうした制限の撤廃にある。この点は後で問題になる「労働力商品化」の廃絶という問題を考える際にも重要である。）

さて大衆の欲望の制御が問題となるとすれば、その場合にはおのずと「善い欲望」と「悪い欲望」との区別づけが必要となる。誰がこれの区別をつけるのか、と問えば、さしあたりはコミュニスト（あるいは「プロレタリア」）権力がそうするのだと言うほかはなかろう。こうしてみると、社会のの全体的制御という目標を達成するためには、「公有化＋計画経済」というセットに「コミュニスト独裁」という要素を付加し、「公有化＋計画経済＋コミュニスト独裁」というワンセットを作るのが最適であるということになる。すなわち、社会主義にとって「独裁」は偶発的な事態でもなければ、「非常手段」であるというわけでもなく、最終目標からの論理的な要請なのである。さらにまた、これもあとで触れることになると思うが、独裁は大衆の教育――社会主義的な人間の創造――という見地からも必然的に要請される。

2

現在世界的なスケールで展開されつつある社会主義の大崩壊という現象をまえにして、これに対してどういったスタンスをとるのかという問題を考えるさい、おそらく基本的な問題は、現実に存在した社会主義は社会の全体制御という「最終目標」へと向かう過程において敗北ないしは挫折した、と考えるべきなのか、あるいは、それとも社会の全体的制御という「最終目標」それ自体がナンセンスなものであるということを今の事態は示しているのか、この二つの判断に対してどういった態度をとるのかということに還元されるように思われる。これは簡単に言えば、我々は合理的制御の完成をあくまでも最終目標として目指すべきなのかどうか、というテーマでもある。

現実に存在した社会主義を完成途上における挫折の形態とみる論者は、この挫折をもたらした要因として、たとえば、①党官僚層の堕落、②計画経済の手法の未熟性、などを挙げるし、さらには③資本主義的世界システムの存在それ自体に（ソ連・東欧あるいは中国などもこのシステム内に組み込まれているという事実に）原因を求める見方もある。この最後の場合には、はなしは例の世界革命論とつながっていくわけである。しかし、いずれにせよ、最終目標それ自体については、東欧社会主義の崩壊を前にしても、あまり反省はないようにみえる。

例えば、古典的なマルクス主義者にとっては、労働力商品化の廃絶、あるいは〈資本・賃労働関係〉の廃絶を目標として設定しない思考はすべて資本主義の修正論にすぎず、問題外の思考とみなされる。しかし、労働力商品化の廃絶、あるいは〈資本・賃労働関係〉の廃絶とは、一体どういうことなのであるか。いずれにせよ、その前提条件は市場経済の廃絶ということなのであろうが、しかし、我々の歴史的経験からみれば、そうした手法において資本主義を克服すると称する試みにはロクなものがなかったのであり、資本主義よりもはるかに悲惨な結果しかもたらすことがなかったのである。今まではそうであった、という言い方も可能であるかもしれないが、だが、我々はこれまでの歴史以外から学ぶべき場所はないのである。こうした歴史の経験から何らかの論理を引き出そうとするとき、我々はとりあえず、資本主義の克服にはある種の限界線が存在し、それをこえるときは、場合によっては、きわめて醜悪なるシステムが生まれることになる、というほかはないのである。

市場経済に対する過度の抑圧は社会の機能不全を招き、労働力商品化の廃絶は〈労働力の国有化〉をもたらしただけである。労働力商品化の前提条件、すなわち、生産手段からの分離、職業の自由選択と居住制限の撤廃といったものは、たしかに一面ではマイナス効果をもつものであるが、他面では民主主義の前提条件としても機能するのである。

ときとしてマルクス主義者は〈国家と市民社会〉との分離の止揚を

語る。これは、換言すれば、公的な領域と私的な領域との分離の止揚ということでもある。簡単には、政経分離の止揚といってもよい。「分離の止揚」という発想はマルクス主義の文脈ではよく使用される発想でもあり、たとえば、立法・司法・行政権力の統合を目指すいわゆるコミューン型権力という発想にもそれはみられる。

だが、現実おいて、国家と市民者社会との分離の止揚という発想がもたらしたものは何であったか。それはまず第一に社会の全領域を支配する権力の成立である。コミューン型権力といっても、せいぜいのところ「大衆歓呼的独裁」以外のものが出てくるとは考えられない。そしてまた、公的な領域と私的な領域との「統合」は、実際には、公私の混同と公的なものの私物化を生み出し——現実の社会主義社会では、上も下も、それぞれのポジションに応じて、公的財産の浪費と横領に励んでいる——そして、これが社会的モラル全体の頽廃を生み出すのである。社会主義社会にみられる無責任の心性、契約の履行における誠実性の欠如、劣悪なサービスと無愛想な店員、こうした道徳的頽廃の現象は〈国家と市民社会との分離〉の止揚が生み出したものにほかならない。「親方日の丸」ではマルクスの考えたような自立的人間は育つことがないのである。

以上の問題は共同体志向が孕む問題としても整理できる。共同体志向は場合によっては「群れへの志向」となり、倫理的な頽廃を生み出すのだが、無責任なもたれあいを潜在的に可能とする共同体的な社会において、なおかつ公共意識の高い人間を育てるということになると、ここではある種のテロリズムが作動することになろう。すなわち、ここに「教育独裁」の思想が登場するのであり、倫理的に高度な水準をもった人間——なんなら「全面的に発達した人間」といってもよいが——を創造せよ、という要請が全社会に響きわたることになる。我々は社会主義の歴史のなかで、ボリシェヴィキから毛沢東、金日成からポルポトに至るまで、そうした声に不足することはない。

3

人間はたしかに学ぶことのできる存在である。我々は倫理的な問題についても、我々の様々な経験のなかで学んでいく。おのれの欲望を制御することについても我々は学んでいく。しかし、肝心なことは、欲望の制御は欲望の展開の中からしか学ばれることはないという事実である。ポルノ的欲望の虚しさはポルノ文化の洗礼をくぐり抜けなければ学ばれることはないし、エコロジカルな意識と感性もまた大衆消費社会の展開の中からしか育つことはないのである。倫理とはすべてこうしたものである。倫理をいま市民的公共性の意識と言い換えるならば、ともあれ、事実的には、こうした市民的公共性の意識は近代資本主義の展開自体が生み出したものである。そして資本主義が「合理的国家」と同時に民主主義システムと思考とを生み出したのだとすれば、資本主義の自己展開とともに民主主義的な意識もまた「おのずと」生まれるのであると言えよう。それは全能の権力——スターリン的なものであれ、「真の」コミュニスト的なものであれ——が大衆に教えるといった性質のものでは決してありえない。民主主義とその倫理とは「おのずと」学ばれるものであるし、そして、「ブルジョア民主主義」と大衆消費社会の展開とがそうした市民意識を育てることになったのであり、そして資本主義のみが「ブルジョア民主主義」と大衆消費社会との創造に成功したという限りでは、倫理的人間の創造という点においても社会主義は資本主義に敗北したのである。したがって、資本主義は、経験の教えるところによれば、民衆の生活の向上という点についても、また倫理的な人間の育成ということについても、社会主義よりも優れたシステムなのであるというほかはない。社会主義の倫理的な領域での敗北は同時に共同体志向という発想のもつ限界を示しているように思われるのだが、これは共同体的倫理が市場経済の倫理よりもアプリオリに優れているわけではないということである。

以上のことを端的に言えば、資本主義の破壊には、経済的にも、倫理的にも、ある種の限界線が存在するのだ、ということになろう。我々はいまなおこの限界線を突破する、あるいは無効にするような思考を所有してはいない。いまとりあえず言えることは、例の「最終目標」の実現された、あるいはそれへと向かう運動は資本主義よりも醜悪な社会システムに帰着するであろうということだけだ。とすれば、社会主義に残されていることは、資本主義と共に走ることだけである。資本主義の自己批判的な意識として生きることだけである。

このような思考は確かに一面においては「凡庸さ」への屈伏であろうし、そして精神の凡庸性について言えば、これを下等なる家畜の性癖とみるニーチェの精神を断固として肯定すべきであろう。悪臭を放つ俗悪なるものは我々の社会の属性となっている。株や金利の上下動に一喜一憂し、けちくさいゼニ勘定に生の軸点をおく心性は俗悪なるものの典型である。この種の小市民どもにとっては、芸術でさえ投機の対象以上のものとはなりえないのである。「高貴なるもの」は、なるほど、つねに定義不能のものとしてある。「高貴なるもの」は、つねに精神の志向性としてしか定義不能である。それゆえに、俗流の唯物論者たる小市民にとっては、不可視のものは、存在性をもたないのである。モノとゼニの世界のみが、彼らにとっての、唯一の現実性を構成するというわけだ。人間というものは、あとさきを計算しはじめたら、もうおしまいなのである。

この種の畜群を生み出したという一点においても、たしかに、資本主義は断罪されるべきなにものかでありうる。資本主義のこの俗悪さに対する深い嫌悪感、これがコミュニストのみならず、西欧知識人たちをも引っ張ってきた精神の機制であった。我々はアドルノのなかに、ウエーバーやニーチェと共鳴する精神を容易に発見することができる。彼らにとって、資本主義は、富の不平等を生み出したからというよりも、むしろ、「俗悪なるもの」を生み出したという一点において、非難されるべきものとなる。このような眼差しは、もちろん現存社会主義にも向けられるわけだ。それゆえに、あえて言うならば、西欧的知性は、ときとして、ハードなボリシェヴィズム、あるいは場合によっては、呵責なきファシズムの方向に共鳴することもありうるわけである。そうしたものが、小市民的な俗悪性の彼方に連れていってくれるかのように見えるときには。

つまりは、マルクス主義が資本主義の自己批判的意識として生きる、ということは、きわめて危うい綱渡りの局面に自己を置くということでもある。「俗悪なるもの」への嫌悪はつねにテロリズムの方向へと我々を引き寄せる。だが、精神のテロリズムを放棄するときには、マルクス主義それ自体が俗悪なるものの一員となる。それならば、テロリズムとともに滅んだ方がましではないか、という意識と同時に、しかしなお、と問いはじめる意識、この交点に現在のマルクス主義は位置しているわけである。

いずれにせよ、マルクス主義は、資本主義と共に、俗悪性のなかを、両義的な意識をもって、走り始めるほかはない。資本主義が形態の変化を反復しつつ、その進化の果てに、資本主義とは呼びにくいようなナニモノカに進化するとすれば、我々はそのときそれを「社会主義」と呼べるのであるかもしれぬ。そのとき、社会主義とは資本主義進化の極限概念（限界概念）として定義されうるようなナニモノカとなる。